

加藤文俊研究会

何が起きるかわからない…。

ぼくたちは、変化に満ちた時代に暮らしています。

たとえば、じぶんの身近な生活空間について考えてみると、まちや地域をめぐる、暗い話題は絶えません。実際に、“シャッター通り”と呼ばれるような商店街は、閑散としていて、寂しい気分になります。何らかの方策を求める声が、聞こえてくるのも確かです。しかしながら、ここ数十年、学生たちとともに全国各地を巡っていて、あらためて気づいたのは、そのような不安（あるいは不満）、問題に向き合いながらも、明るくてエネルギーあふれる人びとが、確実にいるということです。そこに、“何があっても、どうにかなる”という、人びとの逞しさを感じます。また、さまざまな問題を抱えながらも、ぼくたちを笑顔で迎えてくれる優しさにも出会います。**それが、リアルです。**

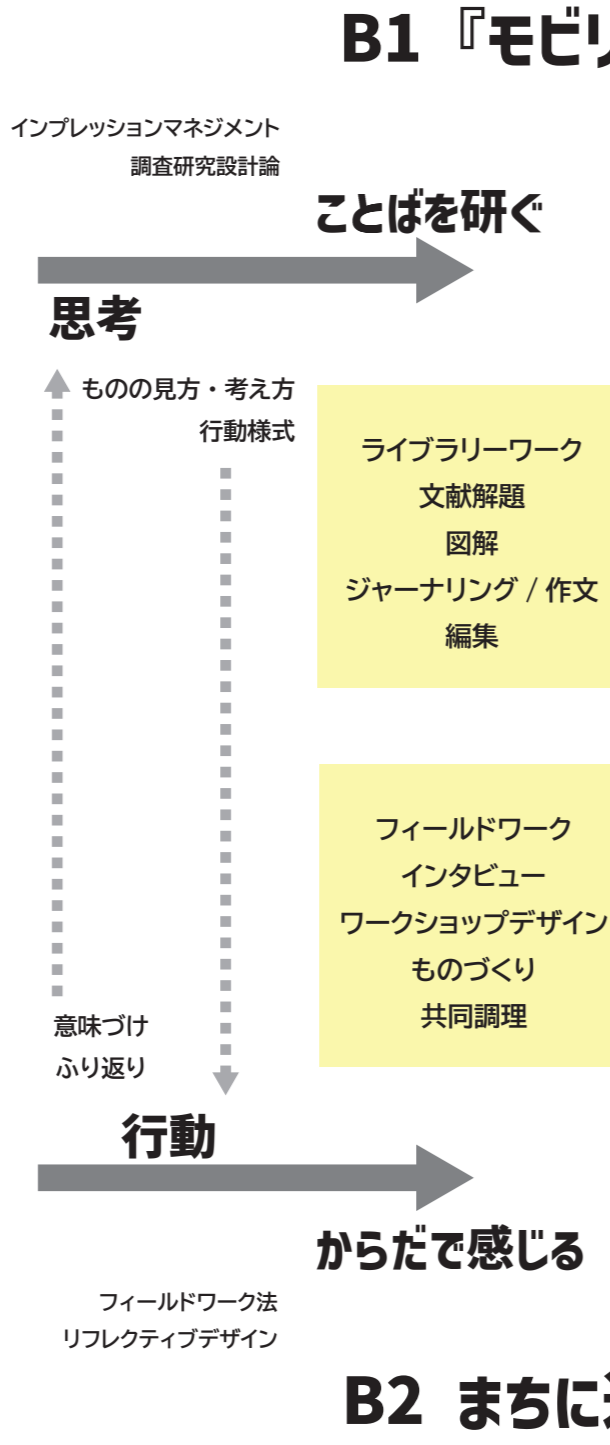
この圧倒的なパワーを持って、目の前に現れるリアリティに、どう応えるか。それはまさにコミュニケーションにかかわる課題であり、ぼくたちが「場のチカラプロジェクト」として考えてゆくべきテーマです。お決まりの調査研究のスキームに即して、「報告書」を書いているだけでは、ダメなのです。つぶさな観察と、厳密な記録、さらには**人びとのかかわりをもふくめたかたちで、学問という実践をデザインすること**に意味があるのです。

場のチカラ プロジェクト

場のチカラ プロジェクトでは、コミュニケーションという観点から「場」というコンセプトについて考えます。ぼくたちの日常生活のなかで、創造性に富み、活気のある「グッド・プレイス (good place)」はどのように生まれ、育まれてゆくのか。まずは、じぶんの足で歩くことから始めます。五感を駆使してまちをじっくりと眺め、気になった〈モノ・コト〉をていねいに「採集」することを大切にします。それは、つまるところ、人との関係性を理解することであり、じぶん自身と向き合うことでもあります。

「場」は、たんなる物理的な環境ではなく、人と人との相互作用が前提となって生まれます。つまり、「場」は、コミュニケーションのための〈空間と時間の整備〉(つまり、ファシリテーション)として、アプローチする必要があります。さらに、人びとが「状況 (situation)」をどう理解するかは、個人的な問題で社会的な関係の相互作用の所産として理解されるべきものです。関わる人びとの数によって、「場」の性質は変わります。単発的に生まれ、一度限りで消失する「場」もあれば、定期的・継続的に構成される「場」もあります。

こうした人びとの暮らしや生活を理解するための「しかた」(調査・学習・表現に関わるさまざまな考え方・道具・実践)をデザインし、実際にフィールドに出かけて、その有用性を試すこと、意味づけをおこなうことが、このプロジェクトの中心的な活動になります。



B1 『モビリティーズ』を読みなおす

インプレッションマネジメント 調査研究設計論

ことばを研ぐ

思考

ものの見方・考え方 行動様式

ライブラリーワーク 文献解題 図解 ジャーナリング / 作文 編集

フィールドワーク インタビュー ワークショップデザイン ものづくり 共同調理

行動

フィールドワーク法 リフレクティブデザイン

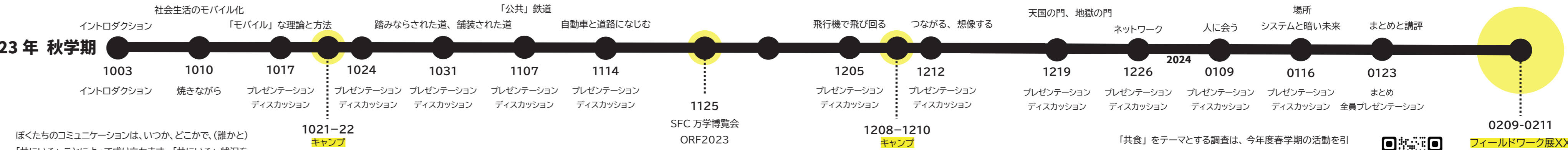
からだで感じる

B2 まちに還すコミュニケーション

ぼくたちのコミュニケーションは、いつか、どこかで、(誰かと)「共にいる」ことによって成り立ちます。「共にいる」状況を理解しようとするさい、**おのずと「移動 (移動性)」への興味がわきます。**

いつ、どこで会うのかを約束する。誰かに会うために、移動する。日常生活におけるさまざまな段取りのなかには、移動にかかわるものがたくさんあります。もちろん、ネットワーク環境を前提として、ぼくたちの「移動」のありようは大きく変化してきました。たとえばソーシャルメディアにおいては、位置情報はもとより、行動軌跡やアクセス履歴と

2023年 秋学期



ぼくたちのコミュニケーションは、いつか、どこかで、(誰かと)「共にいる」ことによって成り立ちます。「共にいる」状況を理解しようとするさい、**おのずと「場所」や「場づくり」へ関心が向かいます。**

「場所」をどのように理解するのか。まずは、実際にさまざまな場へ赴いて、観察・記録したり、人びとに話を聞いたりすることからはじめます。フィールドワークやインタビューに代表される定性的調査の方法と態度を実践的に学ぶために、「キャンプ」と呼んで続けている実践がありま

いった情報の活用がすすみ、「会うこと」「いること」の意味を変容させています。2023年秋学期は、あらためて「移動」について考えることにしました。「移動の社会学」を提唱していたジョン・アーリ (1946-2016) が、**COVID-19の影響下での日常生活を体験していたら、どのような洞察をくわえていたのか。**『モビリティーズ』をもう一度読みなおしながら、これからの人と人のコミュニケーションのありようについて再考します。

(参考文献) ・荒井良雄ほか (1996) 『都市の空間と時間：生活活動の時間地理学』古今書院 ・ジョン・アーリ (2015) 『モビリティーズ：移動の社会学』作品社 ・アンソニー・エリオット+ジョン・アーリ (2016) 『モバイルライブス：「移動」が社会を変える』ミネルヴァ書房 ・エリック・クリネンバーグ (2021) 『集まる場所が必要だ』英治出版 ・エドワード・ヒュームズ (2016) 『「移動」の未来』日経 BP

(参考文献) ・加藤文俊ほか (2014) 『つながるカラー：コミュニケーションを「味わう」場所をつくる』フィルムアート社 ・シェリー・タークル (2017) 『一緒にいてもスマホ：SNSとFTF』青土社 ・福田育弘 (2021) 『ともに食べるということ：共食にみる日本人の感性』教育評論社 ・藤原辰史 (2020) 『縁食論：孤食と共食のあいだ』ミシマ社

B1 『モビリティーズ』を読みなおす

一学期をかけて、『モビリティーズ』を読みすすめていきます。毎週、全員が当該の章を読んで内容を図解し、クラスに持参します。「研究会」の時間には、その内容についてディスカッションし、メンバー間で図解を交換してコメントし合うやり方を試してみるつもりです。本を読んで、その概要を文章としてまとめる(要約する)のではなく、**話の流れや概念どうしの関係**などに意識を向けながら、読み込みます。この一連のプロセスを経て、共通のものの見方・考え方、さらには行動様式が育まれることを期待しています。これによって、フィールドワークやインタビューをはじめとする調査や社会実践 (B2) が円滑にすすむはずで

ことば

からだ

B2 まちに還すコミュニケーション

「共食」をテーマとする調査は、今年度春学期の活動を引き継ぐかたちになりますが、春を「理論編」だとすると、**秋は「実践編」**になります。これまでの成果をふまえつつ、フィールドでの試行により力を入れて、「共に食べる場所」を具体的に作りながら、人と人のコミュニケーションについて考えます。とくに、COVID-19の影響下で「黙食」を強いられ、誰かと食卓を囲む体験が希薄だったこともふまえ、「キャンプ」での過ごし方を工夫したり、日常的に共同調理の機会をつくったりしながらプロジェクトをすすめます。

図解による各章の要約、コメントの交換をとおした読解のプロセスは、成果物として編纂し、「フィールドワーク展 XX」で展示します。



0209-0211 フィールドワーク展XX



学期をとおして、「共に食べる場所」をつくるためのメディアやツールをデザインし、実践報告とともに「フィールドワーク展 XX」で展示します。